

## いちご新品種「とちあいか」の基肥施用が品質・収量に及ぼす影響

### 要約

とちあいかにおいて、エタノール還元土壌消毒下での基肥の有無による品質の差は、基肥無しの方が障害果率は高かったが軽度の障害であり、年内のB品率は基肥の有無で差は見られなかった。収量は、供試区(基肥無)で8.37t/10a、対照区(基肥有)で8.03t/10aとなり、供試区は対照区の104%であった。

### ○ 展示のねらい

農業試験場いちご研究所が開発した「とちあいか」は、初期生育が旺盛になる畝上げ後消毒において障害果の発生が多いことから、基肥の有無による障害果の発生や収量に及ぼす影響を検討する。

### ○ 主な成果

表1 出荷形態割合及びB品率

		11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	合計
供試区 基肥0kg/10a 追肥11.45kg/10a	平バック	2.4	10.0	23.3	16.7	2.0	1.0	0.6	11.2
	2段バック	97.6	90.0	76.7	83.3	98.0	99.0	99.4	88.8
	うちB品	5.0	1.4	2.6	1.8	10.8	18.3	4.1	15.9
対照区 基肥4kg/10a 追肥7.45kg/10a	平バック	1.7	8.6	10.8	14.9	3.1	4.2	0.6	6.2
	2段バック	98.3	91.4	89.2	85.1	96.9	95.8	99.4	81.9
	うちB品	5.0	1.6	2.4	0.9	3.1	1.4	3.9	6.2

※割合は生産者出荷実績(バック数)より換算。対照区は農家慣行。9/14、硝酸態N 供試区7mg/100g、対照区14mg/100g

障害果の発生は、年内のB品率は基肥の有無で差は見られなかった。供試区において1月下旬～2月下旬開花の花でミツバチの訪花不足による不受精果が発生したため、B品率が高くなった。供試区は1月に平バックの割合が多かった。1月頃は供試区で着花数が少なく、果実の肥大が良かったためと考えられる。

表2 可販果収量

	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	合計	障害果率
	(kg/10a)								(%)
供試区	816	957	1,110	1,568	1,728	969	1,225	8,373	17.3
対照区	852	934	1,009	1,499	1,467	1,003	1,262	8,025	7.7
対照区比(%)	(96)	(102)	(110)	(105)	(118)	(97)	(97)	(104)	(224)

※障害果率は調査区画の株より調査

※収量は生産者出荷実績(バック数)より換算

可販果収量は、供試区で8.37t/10a、対照区で8.03t/10aとなり、供試区は対照区の104%であった。販売金額は供試区で10,400千円/10a、対照区で10,150千円/10aとなり、供試区は対照区の102%であった。また、糖度は両区で大きな差は見られなかった。

### ○ 今後の方向性

本展示ほでは、障害果発生について処理間差が判然としなかったが、追肥型の肥培管理は収量が高かったことから、今後、少量多回数の追肥体系を推進していく。

実施機関：塩谷南那須農業振興事務所経営普及部 実施場所：高根沢町

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315